

日本一親孝行！

1. プロローグ

ガチャガチャ・・・・・・・・・・ガチャーン・・・・。

まだ夜明け前の肌寒く暗い部屋の空気の中で、重い鉄の音が響いた。なんだか、うちの玄関の重い扉が開いて、また閉まったような・・・・。まどろみの中で私は、自分が昨夜玄関のドアを施錠していなかったことに気がついた。昨夜一週間分の食材の買い物をし、それらと仕事の荷物を運び入れることに気を取られて、最後の戸締りの施錠をしなかったのだ。

しかしそのあと、それ以上の音はせず、私は部屋の空気とは対照的な夫のぬくもりと眠気に包まれて、再び眠りに落ちた。

カチャ・・・・・・・・・・。

それからどのくらい寝たのかはわからない。そんなに長い時間ではなかったと思うが、また同じ音がした。私は今度ははっきり目覚めた。今度は・・・・人の動く衣擦れの気配までが空気を伝わってきた。そして、パチッと空気を伝わって鮮明な音がした。私は首を動かし、玄関のほうの様子を伺った。壁の向こうが明るい。向こうが玄関の電灯がついたようだ。しかしそれはほんのわずかのことで再度パチッと音がして、電灯は消え、遅い暗順応で私には何も見えなくなった。そしてガチャーンという重い鉄のドアの音とともに明らかにうちの玄関が閉まり、今度はカツカツカツカツ・・・・・・・・という華奢なハイヒールの足音がした。その音は外階段への通路のドアのあく音へと続き、やがてそれはマンションの非常階段を降りていくカンカンカンカン・・・・・・・・というヒールの音に変わり、確実に遠ざかっていった。

布団の中で、高鳴る動悸とともに私の頭はめまぐるしく廻り始めた。いったい誰が・・・・。

四女のしおりは今、いとこたちと帰省した夫の田舎で祖母やいとこ達と眠っているはずだ。しかし何かあって、急遽こちらに帰ってきたのかもしれない。いや、中学生1年生の彼女は、あんな華奢な音のヒールの靴は持っていない。では、知り合いの誰かが何か急な事が起こって来たのか。私は枕元の携帯電話の着信履歴をすばやく見た。しかし、そこにはそれを思わせる新しい着信はなかった。

最近華奢なヒールの靴を買った三女のえりな・・・・？まさか、夜中に抜けて、こんな時間に帰ってきたのだろうか？でも、わざわざ玄関に電気をつけて入ろうとしながら出ていくなんて！

何か、誰かに重大な問題が起こった可能性があるとしても、これはとりあえずのところ、

今はきっと夫を起こさないようにしたほうが無難だろう……。着信履歴の携帯画面の光を夫の方に漏れないようにと思ったが、その努力は関係がなかった。夫がこちらに寝返りを打った。私は着信履歴が何もないことを見てとると、すばやく携帯画面を閉じた。

夫はいかにも眠そうに声を発した。

「今、玄関が開いた音がしたよな。うちの子か？うちの子の友達か？玄関が開いたような気がしたが。」

私の胸の動悸は、夫に伝わるのではないかと思うほどに強くなった。

「え？」

と、自分の胸の動悸の音をかくすように急いで、しかも夫が眠気に負けてくれるように、いかにも眠そうな小声で私は答えた。とにかく今は玄関には闇と静寂しか残っていない。

私の強い動悸はそのあたりの肌寒い空気をゆるがせているような気がした。が、かろうじて夫にはわからなかったようであった。

空気が揺れるほどの動悸の理由は、うちの子どもの誰かが本当に夜中に家をそっと抜け出してしまったのかもしれないと思ったからである。そう思うと、くらくらしそうな不安でいっぱいになった。えりなは先日、スーパーのレジのアルバイトで入った給料で、ヒールの華奢な靴を買った。夜中に抜け出したなんて……。それにしても明け方近くのこんな時間まで、どうしたのだろう……。また、わざわざ玄関の電灯をつけたのはなぜだろう、彼女なら、足探りでそっと部屋の中に入れたはず……。そしてなぜまた玄関からそのまま出て行ったのだろう……。

私はひたすら、もしえりなならそれをどう夫に言い訳して説明しようか、それともごまかそうかとひたすら、頭の中でめまぐるしく考えていた。

その一分ほどの長い長い沈黙のあと、夫は口を開いた。しかし、4除のしおりの事だった。

「田舎でなにかあったんじゃないか。だから急にしおりだけを玄関まで届けてきたんじゃないか。」

私は思わず、

「でも、ヒールの靴音だったでしょ。」

と、私にとっての一番の心配……。あのヒールの音はえりなのもの？..を匂わせる発言をしてしまった。そして取ってつけたように、

「もしも田舎からなら、絶対に電話で連絡が入っているはず。」

と余計な否定をしてしまった。また私には長い長い沈黙が流れた。

夫はこちらにはっきりと向き直り、私と同じように、自分の携帯の着信履歴を確認し始めた。

「きっと何か田舎であったんじゃないか。すぐに出て階段を降りたのなら、助けにか手伝いに行ってやらなければならない事が下で起きているんじゃないか。行ってやらないと……。」

そのひとことに私は救われ、ベッドから大急ぎで『堂々』飛び起きて、急いで服を簡単に身につけ、一番近くに合ったコートを引っ掛けて、夫よりも先に玄関から通路、エレベーターへと飛び出した。

2. ヒールの主

エレベーターの階を示す数字の次々に下がっていく点灯した数字をまどろっこしく思いながら、一階に到着した。ゆったりと開き始めたドアをすり抜けて、外に飛び出した。そこには、探すまでもなく、華奢なヒールの靴を裸足に履いた少女が、わきの非常階段の下の段に座り込み、うつむいて携帯に必死にメールを打っていた。薄暗かったが、それは……あきらかにえりなではなかった。私は安堵で目の前がくらくらした。

そのふらつきを立て直すように足をぎゅっと踏みなおし、薄暗い中で携帯の明かりに顔を染めるその子を見つめ、もう一度、本当にえりなでないことを確認した。服も違う……髪形も違う……携帯に照らされた顔の輪郭も違う……。絶対違う！

これだけ確認すれば、もう引き返してもよかったのだが、この子の素足が気になった。

この子が私の家の玄関の戸を開けたのだろうか？なぜ？？なぜ電灯までつけたのだろうか。どう考えても窃盗目的ではない。何を見たかったのか……おそらく知り合いの部屋かどうかであろう。誰かを探して訪ねてきたのだろうか。それももし、来慣れた彼氏の家などであれば、間違えることはまずありえない。ほんの一度か二度ほど来た人の部屋を探したのだろうか……。

そんなことを考えながら、じっと携帯に向かってメールを打つその子を見つめていた。その子は、携帯を打ち終えて顔を上げ、私に気がついたようだった。そこにも沈黙が流れた。

「なんか用？」

沈黙を先にその子が破った。

「さっき、私のところのドアをあけたのはあなたかしら？」

「え？知らない、知らない！どうかしたん？」

その子はいかにもうるさそうに言った。

「そのヒールの足音だったわ。2度私のところのドアを開け、そして2度目には玄関の電灯をつけたわね。」

もっとうるさそうな言葉が返ってきた。

「そうだとしたら、それがどうした！」

「なぜドアを開けたの？電灯をつけたの？」

「彼氏が家に入れてくれないから、どこの家でもいいからもぐりこもうと思ったんだよ！」

「そうかなあ？普通は彼のところに入れてもらえないからって、知らないところに人にも

ぐりこもうなどとは考えないよ。誰かの家に潜り込むなら、玄関の電気を付けたりしないよ。」

「彼氏がまだ仕事が終わっていないから、彼氏の部屋の場所がわからなかった！」

「明け方のこの時間にまだ彼の仕事が終わっていないの？場所がわからないのに、彼の部屋に来たの？」

「彼氏と喧嘩してしまったんだってば！鍵を持っていないから、部屋に入れないんだ！彼氏が部屋の鍵をあけてくれたのかと思ったんだよ！」

やはり玄関を開けたのは、この子だったのだ。えりなではなかったのだ、えりなが夜中に抜け出していたわけではなかったのだ、なあんだ、そうそう・・・と安心が実感となってくると、買ったばかりらしくまだどこも汚れていない真っ白な毛皮のショートジャケットとはうらはらに素足でピンヒールのパンプスのこの子が寒そうで、マッチ売りの少女を思い出した。動悸はもはや完全に治まっていた。

「その人、彼氏なの？」

「・・・・・・・・・・。」

「その人は優しかったのね。そこに今からなんとか泊めてもらおうと思ったけどその家が何階だったかがわからなくなったんだ。何とか見つけたかったけど、どうしてもわからないし、戸が開かないし、おまけにその人以外に今日は行き場所が見つからないんだね。」

「私はね、どこでも誰でもなんでもいいんだって！サムイからね！」

そこにエレベーターが下りてきてドアが開いた。服を着た夫が現れたことで、話は中断した。

「この子か？」

私はその子に目配せをしながら、急いで夫に

「ええ、階を間違ったんだって。」

と言った。

「けど、うちの部屋に入ろうとしたぞ、電灯までつけて。もし俺らがいなかったら、入ってくるつもりだったんじゃないか。おかしいぞ。市内で強盗事件が続いていて、ぶっそんな最近だからああ・・・・・・・・。警察に言わなくてもいいのか？君はいくつ？どこの人？おい、どうも若すぎるような気がする。警察を呼んだほうがいいんじゃないか。」

確かに未成年が厚化粧をしているとしか見えない。夫は幼さがはっきり残るその子の正面に立った。突然その子は立ち上がって叫んだ。

「そうやって、おとなは私に向かってすぐに『出て行け！』とか、『悪い子だ！』とか言うんだ！だから大人は大嫌い！ちなみに私は今 20 歳！」

そう叫んで足早にその場尾立ち去ろうとした。その子の背に、私は

「どこか行くあてがあるの？」

と言葉で追いかけた。その子は立ち止まって向き直り、叫んだ。

「私にまとりわりつくなくて！私はあんたに用はないんだ！おとなはいつもそう！私が必要

とする時は私を無視をしたり突き放したりするくせに、いざ私が出て行こうとしたら、今度はまわりつく！うるさ〜い！」

きつい目だった。私は瞬間、めまいがした。外の夜の世界にそれなりの救いを求めて泳ぎ出した子だったのだ。夜の好都合な闇と光の中でかろうじて、刹那的に他人である誰かに愛されることで、自分で自分を支えて生きている子だったのだ。

その子は、さっきまで響いていたあの華奢なヒールの音を今度はアスファルトに響かせて、その場から走り去った。

「上がろう。」

白い息を吐きながら夫はそういうと、私の肩を抱いて私をエレベーターに乗せ、

「まあ、家族が皆無事でよかった。」

と言った。

私ははっとした。夫と部屋に戻り、子ども達の部屋のドアを開け、急いでえりなの寝床に行くと、そこでえりなは安らかな寝息を立てて寝ていた。思わず、

「えりちゃん・・・。」

と呼んでしまった。

「なあに、かあさん・・・。」

と眠そうな声で返事が返り、素直な目をうっすら開けた。心の中で一時的にでもえりなのことを疑ったことを申し訳なく思い、じっとみつめていると、えりなは程なくまた目を閉じて、眠ってしまった。その安心して寝ているえりなの寝顔とは対照的な、先ほどの女の子の私達をにらみつけて走り去ったときのきついまなざしが思い出され、『うちの子どもが本当によかった！』と思う安堵のあとからなんだかわけのわからない苦しさ胸の中にあふれてきた。

夜明け前の闇をまだ広げている窓に歩み寄り、ガラスに張り付いた結露を手のひらで拭き取ってそこから下をうかがうと、マンションの向かいの道路には先ほどの女の子が立ったままでまた携帯に向かって必死にメールを打っているようであった。街灯の下で、スポットライトに照らされているようで、闇の中で浮き上がっていた。素足が寒いのだろう、両足を絡ませるようにして足踏みをしていた。

時刻は午前6時前。正月開けの今は、外気はどこまでも冷たい。今日は日曜日とはいえ、もう私が朝の家事の為に起き出してもおかしくはない時刻である。夫はエレベーターから戻ってきてすぐにベッドに入り、また眠った。

私達の居住空間は、子ども達の部屋とは室内のドア壁を通じてつながっており、二軒分が一軒となっている。もうひとつの子ども部屋のある方の玄関のドアならば、誰か来客があっても、夫の今の眠りを妨げることはない。

もう一度窓の曇りを指でぬぐって、窓の外の下に見える道路を見た。その子はそのまま寒そうにしながら、イライラと落ち着かない様子だった。誰か迎えが来るのだろうか。

ここからはよく見えないが、吐く息はきつと白い。娘と同じような、バックバンドのピンヒールの靴を履いていた。そして何にあわてたのか、この真冬にはありえない素足だった。

私は子ども部屋の方の玄関のドアを、内側からそうっと開けた。そして、手を添えて最低限の音量で鉄のドアを閉めた。

3. 寒さ宿り

エレベーターはゆったりと降りていった。扉が開いて、私は一階の踊り場に出た。周囲の静寂に合わせて靴音を立てずに、私は外気の中に足を歩み出した。なにも慌てずとも、その子はまだそこにいるだろう。そんな穏やかな確信があった。

それは外れていなかった。向かいの道路にその子は先程と同じスタイルで、イライラしながら立っていた。

建物の陰で見ていると、その子はメールをひとしきり打っては送信し、イライラと1、2分待っては首をかしげながら、また打ってはまた送り・・・を繰り返していた。彼女が画面に集中している間に暗闇の中を伝って少しずつ歩を進め、私はついにその子の後ろに立った。おそらく最終のメールの相手に送り終わったのであろう、イライラしながらまたいまいましそうに首を振った。その途端、

「うおっ！」

と声を上げ、前に飛びのいた。

「なんだ、あんたか。」

私は何も言わずに立っていた。

「なんか用？」

「……………。行くところは見つかったの？」

「あんたに関係ねえ！」

「行くところ、見つからなかったんだね。」

「うるせ！どーでもいいだろ！」

思いつきり巻き舌の返事が、寒さをしのぐように精一杯の声で帰ってきた。

「行き先見つからないんだったら、ちょっと上に上がろうか。寒いでしょ？」

「上？あのさっきの男がいるんだろ！上がんねえよ！上がるわけないじゃん！」

そのまま黙っていると、

「あいつ、いるだろ？上がんねえよ。上がるわけねえじゃんか！」

少し声を落として、しかし巻き舌で言った。

「いない方の部屋に上がるか。ここは寒すぎるもんね、寒さ宿りでもする？」

白い息が今度は私から出て、そして消えた。

「なにい？寒さ宿り？」

ほどなく意味はわかったようであった。

「なんであたしがあんたの言うことを聞かなきゃなんないんだヨ！」

「上がろうか？」

「何で上がらなきゃなんないんだ！上がらねえヨ！」

そう言いながら、その子は動くでもなくその場にいた。その子の口から言葉がまた、白い息とともに大きく流れた。さっきまで寒さをしのぐために細かくカツカツと動いていたヒールは、そのままその場所から動かなくなった。行き場所がないのだ。居場所がないのだ。

「さっきのあの人はいない方の部屋だよ。メール打つのにここは寒すぎるね。建物の中であなたのお迎えを待とうか。」

私は寒さをしのぐためにポケットに突っ込んだ手を片方だけ出して、その子の背中に回してぐっと押した。

「何だヨ！何すんだヨ！」

私は押しを続けた。難なく押されながらその子は

「あの男のいるところには行かねえヨ！」

『あの男』のいるところには連れて行かないよ。いない方の部屋だよ。」

「オマエ、何だよ！さては……あれは彼氏？オマエ、遊んでんのか？」

思わぬ反撃の言葉のその意味を考えながら、さらに背中を押した。

「ま、上がろうか。」

エレベーターに、無理やり押し込んだ・・というよりも、乗せるのにさほどの抵抗はなかった。しかし言葉だけは抵抗し続けた。

「なんだヨ！絶対入らねえからな！」

「さっきの部屋とは違う部屋だよ！」

「入らねえぞ！」

「はい、降りて。ここからは黙って静かに。」

エレベーターが止まり、ドアが開いた。私は続けてその子の背を後ろから押し、彼女にとっては、先ほどのドアの隣のドアでその子の前に回り、できるだけ音がしないようにゆっくりと開け、そしてもう一度その子の後ろに回り、その子をそっと押した。

玄関には、子ども達のたくさんの靴が昨夜のまま入り乱れていた。意外なことに、その子はそれらの他の靴を踏みつけずにわずかに残ったスペースの中に小さく立ち尽くしていた。

私は靴箱にしているラックの中にそれらの靴を積み重ねて、手当たりしだい急いで片付けた。少しでも、玄関の中にもその子の居場所ができるように・・・。

4. 居場所

台所の時計は六時をわずかに過ぎたところであった。子ども達は・・・うちの子ども達

も、子ども達の友達たちも、まだ誰も起きてはいない。外はまだ闇で、室内に入るとかなり外よりはしのぎやすいが、やっぱり寒さはここにも広がっていた。急いでファンヒーターのスイッチを入れ、黄色い豆電球の台所の電灯を明るい蛍光灯につけなおし、そして台所の椅子を勧めた。

「まあ、座ってね。」

玄関で立ち尽くしていたその子は、じっと見ていたが、観念したかのように華奢な靴を丁寧につま先をそろえて脱ぎ、上がってきた。

「トイレ、トイレ！トイレを貸して。」

素直な言い方だった。

「あー。そこを右手に入って突き当たりを右。」

本当は突き当たりも何もないのだが、そこにあるトイレをそう説明した。

「なんだ、遠いのかと思ったらそのままこのことか。オレ、トイレが間に合わないかと思った。」

と言って、がたがたと戸を開けてトイレに入っていった。

私はテーブルの椅子を、あらためて整えた。

「あー、オレ、トイレになっちまって、ホント、どうしようかと思ってた、助かったあ。」

「お茶？コーヒー？」

「あー、水腹はなかなかにはっているから、いらない。でも、やっぱり外は寒かったなあ、あったかいヤツ一杯入れて。それと、たばこ吸っていいよね、当然？」

私は黙ってうなずきながら、即席の灰皿を作った。帆立貝の形をしたコキール皿の上にアルミホイルを広げてかぶせ、きらめくその『灰皿』をその子の目の前に置いた。

「なかなかいい灰皿だ。」

その子はぷあーっと煙を吐き出しながら、本当に慣れた手つきで灰を落とした。

「ああ、ほんとに寒かった。」

「そうだね、まあ、お迎え来るまでここで待っててもいいよ。」

と話していると、うちの子どもの友達が次々と、トイレに起きてきた。新参者に驚いて、彼女らは口々に、言った。

「あれ？お客さん？早いねえ。」

「うん、そうだよ。おはよう。何か飲む？」

「あ、ココアお願い。」

「私はお茶。」

その声に、私の子ども達も起きてきた。皆が口をそろえたかのように、

「あれ、かあさん、お客さん？」

と訊いた。続いていつもの『朝のトイレ前の飲み物のオーダー取り』をしていると、その子は

「あんたの子どもはエラく多いな。さてはあんた、よくよく遊んだな。うちのおかあさん

とおんなじパターンか？顔が違う。お前の子ども、全部女か？」

と言った。

「うちの子は4人。うちの子どもたちは全部女。今日泊まっている子ども達の友達も全部女。ところであなたは何人兄弟？」

「うちは3人。私は真ん中。」

「お姉ちゃんと一緒に暮らしてるの？」

「いや、アネキは中学校頃から家にはほとんどいなかったね。」

「じゃあ、4人暮らし？」

「いや、オヤジはいない。あたしら子ども、三人ともオヤジが違うらしいね。皆、自分のオヤジも誰だかよくわからねえ。まあ、うちはおかあさんがおかあさんだし、オヤジなんてそんなもん、いてもうざいだけだろうけどね。」

「……………」

「でも、うちのおかあさんはほんと、かわいいよ。それは自慢できるね。おかあさんは男にはいつももてて、そういう意味ではおかあさんは苦労しないね。そのおかげでうちらは皆、苦労しっぱなしだけどさ。男ができると、おかあさんはうちにはいなくなる。やっとな男と別れて帰ってきても、仕事が夜のそういう商売だからすぐに次ができる。そのほうがおかあさんはさみしくないだろうね。私らの方は、おかあさんがいないとホントはさみしいけどさ……………。妹は私が育てたようなもんだよ。私はアネキに育てられたね。私は、妹くらいはまともに育ててほしいと思ったけど……………、まあ、そんなことは私には金がなくてとても無理だったね。」

「……………」

いつの間にか、『オレ』という一人称は『私』になっていた。

子ども達は、その子の話に立ち尽くしていた。それを見て、その子は子ども達に

「まあ、座りな。」

と椅子を薦めた。子ども達は、私が作った飲み物に手も付けず、そのまま固まっていたのだ。彼女らの日常には存在しない話である。

5. 日本一親孝行

子ども達がごとごととテーブルの周りの椅子に座ると、彼女はまたタバコを一服して、言葉を続けた。

「まあね、要するに私は、もてる母親を持って苦労したわけよ。私は、妹の保育園の世話とか学校の世話とか、おかあさんがしないことを妹にしてやった。とてもとても、きれいに全部はできなかったけどね。私は母親がしてくれなくて、さんざん学校で困ったから、

妹にはもっとまじな思いをさせてやりたくてね……。アネキは小さいころは私を助けてくれた。何より、よく私と遊んでくれた。ま、おかあさんが遊んでくれなかったからね。アネキは私がさみしさを紛らせるいい相手だったんだし、メシだとか、フロだとか、大人の邪魔がなくて本当に盛り上がり遊んだね。それをいいことに、おかあさんはアネキに私達を押し付けて、家を余計に空けるようになったよ。妹はアネキに向かって『おかあさんの方がいい！』なんて泣いたりした。だからアネキはそれがしんどくなって、だんだん家を空けるようになったね。だから残された私は一生懸命妹のめんどろをみた。私は、妹の面倒を母からは押しつけられなかったし、妹はアネキが出ていった意味をちゃんと学習していて、私には『おかあさんの方がいい！』なんては言わなかったし、私をちゃんと頼って、かわいかったからね。でも妹もやっぱり学校では苦労してた。学校ではいろいろあったみたいだ。そうだろうな……。私もそうだったからよくわかるよ。学校は本当にイヤなところだよ、母親が母親をしない家の子どもにはね。先生なんか、結果しか見ないもんね。私もつらかった。教室の中でみんなが幸せそうに親に愛されて暮らしているのに、そんな中では自分があんまりにみじめだった。教室を出てサボればあいつらは何にも知らないくせに、ただもの『出て来い！ちゃんと勉強しろ！』と言う。私がどんな思いをして家で、教室で生きていたか、あいつらは知ろうともしないで、『ちゃんとしろ！』とばかり言うんだな。『学校に行くのはオマエのためだ』なんて、お定まりのきれいごとばかり。目の前にしているのに、生徒のことを何にも知らない。知らないくせに口を出すなよな！結局何にもできない癖に！二度とあんなどころにはいかないよ。それなのに『来い来い』言うもんだからだから、余計に思い切り逆らってやった。それだけがあの頃の唯一の楽しみだったかな。ま、金が稼げるようになったら、途端にそんなやつらにも関わりがなくなって、ずっと楽しくなったけどな。あ～！学校の頃の事なんて、もう忘れた忘れた！考えない！」

誰も、一言も発しなかった。いや、発することが出来なかったのだと思う。

彼女は話しているうちに燃え尽きたたばこを消し直して新たにもう一本に火をつけ、胸深く煙を吸い込んで、そしてゆっくりと吐きながら言った。

「私は妹に一生懸命尽くした。自分がおかあさんにしてほしかったことを思いつく限り全部したよ。でもね、私はおかあさんにはそんなことは言わなかったね。おかあさんは、私の苦労なんて知らないよ。全然！私がひとこともそんなことは言わなかったからね。もしも知っていたら、そばにいてくれたんじゃないかなとも思ったこともあるけど、でも私はそれを望まなかった。おかあさんはおかあさんの幸せがあった。私はそれのほうが大事だって考えた。私はお母さんに笑っていてほしかった。おかあさんが男で泣くよりも、夕方から仕事に出て、幸せに笑っている方が好きだった。私たちのことでイライラするよりも、おかあさんが幸せに笑って外で暮らしている方がおかあさんが幸せなんだなとわかっていた。私は自分の望みよりもおかあさんの望みや幸せの方を取ったんだよ。わかる？あんならにわかるかな～」

そう言うと突然両手のこぶしを握り締め、机をたたきながら立ち上がって言った。コップの飲み物の表面が揺れた。

「私はすごく親孝行なんだよ！そうだ！こんなに私みたいに親孝行な子どもっていないと思うね！日本一だ！そうだ・・・・・・！絶対日本一・・・・・・！私は日本一親孝行なんだよ・・・・・・！」

最後には涙声になっていた。

そのとき携帯電話がかわいく鳴った。数秒間、音を飲み込むようにその子は黙っていたが、電話に出ると明るく、

「今頃やっと起きたのか？遅い遅い！待ってたよ。凍え死ぬかと思ったゾ。今からそっちに行行ってやるよ！そろそろ私の事がお呼びだろうと思ってね。オレ、すぐそっちに行くよ！」

そう一方的にまくしたて、相手に断られないうちに電話を切ると次は手慣れた会話でタクシー会社に電話をした。すぐにタクシー来ると分かったと、最後のコーヒーを飲み干し、たばこをゆっくりと消し、たばこの箱をポーチに仕舞い込んだ。

「あんた、世話になったな！じゃあまた！」

と言うと、玄関で手を挙げて振り、そして出て行った。

やがてマンションの向かいの道路に現れ、窓から見送る私に手をまた振ると、ほどなく来たタクシーに乗り込んで・・・・・・仕事に向かって行った。

朝日はもう十分に上がっていた。が、日曜日の朝はまだ静けさが残り、タクシーの去ったあとは、何も動かぬ静かな景色であった。

私はいつもの朝の仕事に取り掛かった。

「すごい子ども人生だね。」

誰かがぼつりと言った。

子ども達は・・・・・・いつもの日曜日の朝ならばもう一度寝るところだが・・・・私が思わず飲み物を入れたこともあったのだろう、もうベッドには戻らなかった。それぞれが何も言わず黙って、椅子に座って飲み物を飲んでいて。私は卵を割り、牛乳とマーガリンを出してオムレツに取り掛かった。